

● 第九回
「うちなあ点描」

歴史的建造物の復元・修理事例 (二)

「真壁ちなー」の修理

文・平良啓 *Hironu Taira*

糸 満市の真壁集落内にある古民家「真壁ちなー」は茶処として多くの利用者でにぎわっている。

おいしい料理と飲み物、そして門構えと建築空間の素晴らしさが魅力である。家主のご夫婦は家族と一緒にこの建物を大切に守っておられる。

真壁ちなーは築百十年以上経っている建物で、その間沖縄戦と戦後の混乱期をくぐり抜け、平成十七年には母屋と石垣、井戸、フールが国の「登録有形文化財」に登録されている。

雨端と縁側、表座と裏座の構成となっており、一番座と二番座はそれぞれ八畳間で、前面の縁側の幅がかなり広いのが特徴的である。柱の断面寸法も比較的大きい。興味深いのは、柱や壁などに戦争中に被弾した跡が残っていること、銅釘が見つかつたこと、戦後の修理で床の間の壁に木目のきれいな当時のアメリカ製ベニヤ板が使われていることである。今では貴重な材料となっている。

縁があつて私たちがこの建物の調査・設計に携わることになり、平成十八年五月から建物の本格的な調査を行つて実施設計図を作製した。行政への手続きを経たのち、平成十八年十一月

初旬から翌年の一月末までの工期で修理工事が行われた。

工事を行うに当たっては、老朽化している部分の撤去と補修、構造上弱い個所の補強、新材で見える部分は古色塗りを施して雰囲気なじませる、防蟻処理、台風シーズンを選けて工期は

三カ月を超えないこと、などの方針を確認した。小屋裏を調査すると、梁

や母屋材などの通りが一定ではなく、しかも部材寸法もそろっていないかつた。さらに、継手・仕口の部分が緩んでいた。また、転用材(例えば、かつての柱材をそのまま梁に使うなど)が

かなり見られた。この建物は終戦後間もなく集落の多くの人たちによって修復されたことなので、まさにユイマールの痕跡が実感できる古民家である。

主な工事としては、柱と雨端桁の一部を取り替え、小屋組みを補強し、屋根瓦を全面取り替えて赤瓦の本

瓦葺きとした。ほかにも外壁と内壁の一部補修、台所の改修、建具の補修と網戸の追加などを行った。なお、建物外観と室内の雰囲気は当時の状況を残している。工事が完成したことで耐久性の高い建物に生まれ変わった。

歴史的建造物の修理で大切なことは、まだ健全な部材は可能な限りそのまま利用することであり、なるべく現状を変えない工夫が必要である。そのことで、先人たちの手の痕跡が後世まで残ることになる。ただし構造的な補強や耐久性を高める必要がある場合は、新たな材料を使用する。そのことで現代の職人の仕事ぶりも後世に残ることになる。伝統と新たな技術の混在、「古民家再生」の醍醐味はまさにそこにある。

今回、真壁ちなーの修理工事に参加して、あらためて古民家を中心とした家族の絆の深さと建物を愛する心を感じた。また、工事に携わつた職人の伝統的技術の高さにも触れることができた。百年以上続く歴史の痕跡、そこを訪れる多くの旅人、そして常連客。「先人たちの息吹を感じ、至福の時を過ごせる空間」が末長く続いていくことを願いたい。



真壁ちなー正面(平成22年5月15日)